

Ⅳ 研究の成果と課題

【成果】

〔仮説1〕

- これまで、IKR調査は、事前調査と事後調査までとしていたが、追跡調査まで実施した。その結果、集団宿泊学習以降も、「心理的社会的能力」や「徳育的能力」といった調査項目では、自己肯定感や適応行動の数値が向上するなど、子供たちの意識・意欲の維持向上を図ることができたと分かった。よって、当所に限らず、県内の青少年社会教育施設所員は、どのような活動プログラムが子供の実態や成長に必要ななどについて、学校との連携を密にして取り組んでいくことが重要であると考ええる。
- 具体的には、教科等と関連付けた活動プログラム（指導案）のねらいや活動方法等について、共通理解を図るなど、学校ごとの担当所員が一貫した指導や支援を計画的・効果的に行うことで、子供の「生きる力」の向上につながることが期待される。そのため、今後についても、希望する学校に対し、積極的に連携を図っていきたいと考える。

〔仮説2〕

- 3つのテーマを設定して、体験活動プログラムを組み立て事業展開した結果、個人の基本的な生活習慣・参加者同士のコミュニティを確立することが、とても重要であることが分かった。次年度サマーキャンプは、その基礎を身に付けるためにも当センターの既存の活動プログラムを中心に組み立て、所外活動に生かしたい。またウインターキャンプに向けて、参加者自身でプログラムを企画立案させたい。
- テント設営や野外炊事、アクティブ大作戦など、既存の活動プログラムを実施するだけでなく、ウインターキャンプでオリジナルメニューづくりを取り入れた結果、協調性だけでなく、プログラムの全過程に関わることで主体性を育むことができたため、今後も継続していきたい。

【課題】

〔仮説1〕

- 教科等と関連付けた活動プログラム（指導案）が、「何のために学ぶのか」という学ぶ意義を共有した活動内容となっているか、また、子供一人一人の主体的な体験活動となっているかという点から見直しを図る必要がある。
- IKR 調査結果と、全国学力・学習状況調査や鹿児島学力・学習状況調査結果との比較ができると、より体験活動を通した「生きる力」の向上についての分析が生きてくると考えられるため、調査方法の見直しを図る必要がある。

〔仮説2〕

- ねらいに即した活動プログラムを組み立てたが、気象状況によって体調を崩すことがあった。昨今の気候を考慮し、安心して安全な事業運営を担保しながら、ねらいに即した活動プログラムの組み立てが必要である。

おわりに

令和2年度から本研究テーマに基づく調査研究を推進して参りましたが、集団宿泊学習、主催事業にて、体験活動を通した「生きる力」の変容を検証するために多くの御協力をいただきました。

本年度は、本研究のまとめとして、教科と関連付けた活動プログラム(指導案)を活用した調査研究を推進するにあたり、鹿児島市立南方小学校、玉江小学校、西伊敷小学校、姶良市立帖佐小学校に多大なる御協力いただきましたことに深く感謝申し上げます。

これまでの成果や課題を、今後の事業推進に生かすとともに、所員一同研鑽を重ねて参ります。

〈参考資料〉

※ 独立行政法人 国立青少年教育振興機構「集団宿泊学習の教育効果」

URL:https://www.niye.go.jp/pdf/supportguide2103_A4.pdf

※ 国立教育政策研究所「令和6年度全国学力・学習状況調査の結果」

URL:<https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/index.html>

※ 鹿児島県教育委員会「令和5年度鹿児島学習定着度調査結果報告」

URL:<https://www.pref.kagoshima.jp/kyoiku-bunka/kyoiku/index.html>



研究同人

所長 当房 孝子 次長兼総務課長 脇野 幸一 研修課長 村川 勝博

【総務課】

主幹兼

総務係長 柳田 昌紀

主 査 有川 剛弘

主 事 児玉 華奈子

旧 同 人 林 直樹

【研修課】

主 任

研修主事

社会教育
指導員

中西 翼

当房 秀之

稲田 浩二

桜井 万里

西留 栄俊

長野 一成

大下本 洋平

東 泰宏

仲谷 仁美

片野田 隆紀

